Spatiality

Robert T. Tally Jr.

London and New York: Routledge, 2013.

渡邉　俊

2013年に出版された本書 *Spatiality* は、Texas State University においてAssociate Professor（2014年現在）を務めている Robert T. Tally Jr. によるものである。彼の研究領域は非常に膨大であり、Frederic Jameson をはじめとした哲学や思想を中心に、Edgar Allan Poe や Herman Melville といったアメリカ文学の古典から Kurt Vonnegut のような現代作家に留まらず、世界文学全般を扱っている。いずれも本書のタイトルにもなっている “spatiality”（空間性）をテーマにするものが多い。2009年の Melville 論を皮切りに、Tally 個人名義の著作は6冊出版（予定も含む）され、編集名義も含めると10冊を超えるほど現在精力的に活動している学者である。

第二次大戦以後の世界は歴史に例を見ないほどの空間的・地政学的な変動を経験してきた。国境線を巡る争いは世界戦争を終えても世界のどこかで起き、そのたびに地図上の線の増減・拡張といった更新手続きが繰り返された。一方で、21世紀の我々がよく目にするグローバリゼーションという用語――産業・経済・テクノロジー・交通・メディア・ネットワーク等々の様々な発達によって国家という空間的な線は取り払われ、その結果人々は自由に世界中を移動することが可能になる――には、血みどろの争いと地図上の線のことを忘却したような響きが感じられなくもない。

Routledge の “The New Critical Idiom” シリーズである本書は、近年の文学・文化研究の分野で取り上げられることが多い空間性についての入門書であるが、Frederic Jameson を始めとする様々なポストモダニズム

理論家たちについての言及があり、容易に取り掛かれる類の読み物ではないことを予告しておく。

まず本書は空間性がいかにポストモダン社会で生きる個人の「居場所」を考えるうえで重要な概念であるかを、Frederick Jameson の “cognitive map” について言及して始まる。文学における “map” の機能とは “You are here” という我々個人にとって安心して信頼できる位置情報、分かりやすく言えば GPS 機能のようなものを提供し、どこに進むべきかという方向付けや取り巻く世界や他者を理解するための指標を与えるものだと説明している。

第一章では、空間認識の変遷について文化史や思想史を踏まえながら解説される。空間認識が劇的に変化したのは “linear perspective（線遠近法）” の発達によるところが大きい。中世芸術における二次元平面上の図像的イメージは、ルネッサンス期には数学的に体系化された三次元線画へと移行していく。そしてキリスト教会に支配されていた地図、すなわち天動説は差し替えを余儀なくされ、より科学的で物理的な空間が地図として作成されるようになり、その結果「新大陸の発見」及び大航海時代が訪れるわけである。この過程で国家・植民地・都市といった新しい権力領域が地図上に明確化されるようになり、後に帝国主義・植民地政策が加速していくわけである。

このような地図の書き換えが加速する一方で、西洋近代哲学の側ではヘーゲルの歴史主義の影響が強く、「始まり」と「終わり」という時間的・歴史的な探求をすることが科学的・哲学的な命題の中心へとなった。以降の Heidegger、Bergson、Freud にしても、空間が時間や歴史に太刀打ちできるほどのフォーカスの対象になったのは第二次世界大戦後である。特に 1970 年代以降、前述の Jameson をはじめ、交通や通信などのテクノロジーが可能にした空間の在り方を “time-space compression” と呼ぶ David Harvey、監獄や精神病院を分析した Michel Foucault など空間の在り方を捉え直そうという動きが高まっていく。

“Literary Cartography” と題される第二章では、“Writer as mapmaker” である。Tally が言うには、物語る行為とは地図製作のことであり、そして同時にその地図自体が物語るものである。ここで言われる「地図」

とは 幾何学的な表象物であると同時に、言語によって構成される物を指す。物語はある意味では「現実の空間」の測量行為であり、様々な地理的な要素をまとめ上げ、「現実」と「想像された空間」を組み合わせながら、その世界に形式を与えることである。形式を与えられることにより、地図＝ナラティヴはジャンルものとして構造化される。例えば、ゴシック小説や探偵小説などにおいては舞台とジャンルの結びつきはほとんど決まりきったパターンを持つ。さらに、地図として語るという行為は、近代化・都市化によって失われてしまった居場所とバラバラになった自己を再確認する手段である。特にグローバル化し、世界のシステムがますます多国籍的になっている現代では Jameson の言う認知地図の試みが要請される。

第三章 “Literary Geography” では読者側の立場で論じられる。物語る作者が地図を描くのに対し、物語の読者はテクストという地図上の地形——そこには種々さまざまな意味の起伏やカーブが縦横無尽に存在する——を読み取るだけではなく、その読み取りを読者の経験や感情を頼りにして現実世界の認識を改定していくのだと Tally は述べる。この章では、人々が実際に生きる場所や空間に関する感情構造を分析した Raymond Williams や、*Orientalism* で西洋帝国主義がいかに一方的に東洋諸国という空間を眼差していたかを暴露した Edward Said などが挙げられている。本章は物語る作者側の立場と類似しており、書く行為と読む行為の相関性を示唆していることは間違いないだろう。

第四章は “Geocriticism” と題が付けられているように、ここでは批判的に空間を捉える方法論がいくつも提示される。Gaston Bachelard や Henri Lefebvre などの論者たちが述べるように、空間とはアプリオリに現前するわけではなく、個人の経験や社会によって二次的に構成されたものである。それゆえに我々を取り巻く場所や空間は、個人や集団の記憶が堆積する場所であったり、階級やジェンダーの抑圧が内包する場所であったりするということである。近代における諸空間がいかに社会的な抑圧装置によって調整を受けているかという Foucault のような分析的な立場がある一方で、Walter Benjamin のような「フラヌール」として社会システムにひっそりと抵抗しようという立場も忘れてはいけない。

抑圧的な資本主義社会からの「逃走」を目指そうという Gilles Deleuze の geophilosophy や nomadology に影響を受けた理論家たちも紹介されている。

さて、本書の結論部を解説しつつ私なりの意見を述べながら閉じたいと思う。第 4 章までの大半はいわゆるリアリズム文学と空間との関係性について説明されていたわけであるが、最後は “*otherworldly literature*” という「現実ではない世界」、つまり非現実世界を描いた作品についてである。J. R. R. Tolkien のようなファンタジー・SF 作家が描く空間とは、全く現実と乖離したものなのだろうか？ 果たしてそのような空間は描かれうるのだろうか？例えば外宇宙への探求の物語は、可逆的に地球環境や人間についての本質的な問いがテーマになることがあるとはよく言われる。そのような非現実世界を描くジャンルの物語は、むしろ現実から離れていくどころか、現実世界をより深く理解し、あるいは世界を変えたいという現実の欲望によって生み出されるとさえ言える。Tally が最後にファンタジーや SF を持ってきた理由は、これまでの文学または文学史がいかにリアリズムの手法によって描かれる「現実」に執着しすぎてきたかを批判するためであろう。Poe から Vonnegut、そして Tolkien まで手掛ける Tally の姿勢からは、空間性に着目することによって、単なる虚構にすぎないと見なされたファンタジーの非現実的な世界空間、陳腐なものとして見過ごされていた平凡のように思われる日常的な空間に光を当てることで、新たな文学空間の可能性が切り開けるのではないかというような期待が感じられた。